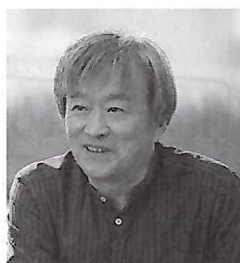


第25回「日本絵本賞」選考報告



松本 猛

(第25回「日本絵本賞」最終選考委員長)

6月25日、第25回「日本絵本賞」最終選考委員会が東京都文京区の全国学校図書館協議会で行われた。当初4月下旬開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症に係る緊急事態宣言の発出により延期。5月下旬の宣言解除を受け、Web会議併用での開催となった。

今回はリニューアルを図るため、「日本絵本賞読者賞」は休止。対象期間変更の移行期間として、2018年10月から2019年12月までに刊行され、全国SLA選定委員会で合格した絵本1,165点（うち翻訳絵本344点）が対象となった。このうち、絵本委員会によって選ばれた「第25回日本絵本賞最終候補絵本」30点（うち翻訳絵本10点）より、おのおのA評価の絵本4点、B評価の絵本4点を選出した事前審査の結果をもとに、最終選考委員がディスカッションと投票を行い、授賞作品を決定。大賞を受賞した『くろいの』は、5名中3名がA、2名がB評価をつけ、委員全員から高く評価された。このほか、日本絵本賞には、『なまえのないねこ』『金の鳥：ブルガリアのむかしばなし』『ばんつさん』の3作品が選ばれた。翻訳絵本賞は該当作品なし。

受賞した作家、画家には賞状、盾および賞金を、出版社には賞状および盾を贈呈。表彰式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止とし、郵送または各受賞出版社に出向き贈呈式を行う。

大賞は銅版画（エッチング）で描かれたモノクロームの絵本『くろいの』が受賞した。この絵本は普通の絵本の倍のページ数を使い、少女が町で見かけた小さな不思議な生き物「くろいの」との出会い、交流、別れを静かに描いている。目以外は真っ黒で少女以外には見えない「くろいの」と親しくなった少女は、「くろいの」の家らしい古い日本家屋に行く。和室でのお茶の後、真っ暗な押入れから屋根裏に入り込んで幻想的な心地よい時を過ごす。何らかの理由で母親を失った少女の心に生じた隙間が、ほかの人には見えない「くろいの」を見えるようにしたのであるが、そこに暗いイメージはない。2人が歩く町並み

や古い家屋や庭は、画面の連続性も意識して丁寧に描き込まれ、ぬくもりを感じさせる。2人が入る押入れの暗闇もエッチングの細やかで柔らかなトーンが少女をやさしく包み込む。この暗闇のシーンがあるからこそ、屋根裏の幻想的な遊びのシーンが力を持って展開する。屋根裏では少女と「くろいの」の体は小さくなり、ヤマネのような動物の柔らかな毛の中で少女は眠りに落ち、母親の夢を見る。少女は満ち足りた思いで目覚め、「くろいの」と別れて、帰り道で父親と出会う。静かで心地よい音楽を聞くような絵本であるが、表現されている世界は、デリケートな心のひだを感じさせ奥が深い。田中清代の銅版画の魅力

が最大限に発揮された絵本。

『なまえのないねこ』はいくつもの賞を受賞した話題の作品である。猫を主人公に、名前とは何かという問いを通して自己の存在意義を考えさせるテーマが多くの人々の共感を呼んだのだろう。この絵本の魅力を形づくっているのは、文を書いた竹下文子のテーマ設定や、展開とエンディングのうまさもさることながら、猫の描写と町の描き方が秀逸なことだ。猫とともに暮らし、猫の描写では定評のある町田尚子の絵は表情の豊かさと猫の個性を描き分け、人間の性格や心理を見ているように読者をひきつける。ラストの少女以外は人間の顔を出さなかったことも効果的だった。猫が動きまわる場所の背景描写から、この猫が住んでいる町の生活感や環境がうかがえ、物語に広がりや奥行きとリアリティを与えている。冒頭の見返しページに描かれたたくさんの猫が、最後の見返しで名前がわかり、本文に登場している猫を探することができるなど、本づくりに細やかな配慮があり楽しめる。

『金の鳥：ブルガリアのむかしばなし』はブルガリアの昔話の絵本化。王の命令で金の鳥を探しにゆく3人の王子の話で、上の2人は邪悪な王子、末の王子が勇敢な正直者の王子という設定。末の王子はみずぼらしい老人の助けを借りて、ある国の王が金の鳥の持ち主とわかり、手に入れようとするが失敗。その王に空飛ぶ馬を取って来いという困難な課題を与えられるが、再び老人の力を借りて見事に成し遂げる。その国の王から金の鳥と姫をもらい帰国の途につくが、途中で兄たちに金の鳥と姫を奪われてしまう。身をやつして城に戻った末の王子が姫を取り戻し、国を治めるようになるというオーソドックスな昔話である。ブルガリアの文化に詳しい八百板洋子が語り継がれてきた昔話を再話し、素朴で幻想的な物語にした。文章も自然体で読みやすいが、この絵本の魅力は何といっても絵の力にある。画家のさかたきよこは驚くほど

細密な色鉛筆の線と繊細なアクリル絵の具のタッチによって美しい色彩の響きを作り出した。大胆な構図と、装飾的にデフォルメされた風景や人間や動物は不思議な物語と相まって読者を異国の幻想的世界へ導く。一場面一場面は一枚の絵としても優れた作品だが、一冊の絵本として見て行くと色と構図の連なりが、いくつもの楽器の音色が響きあって展開する豊潤な交響曲のような世界を作り出している。

漫画家で芸人のたなかひかるの『ばんつさん』は今までになかったナンセンス・ギャグ絵本。表紙カバーや表紙のパンツの絵を見ていだけで笑わせられるが、本文のギャグにはブラックユーモアも隠されていて、おともも楽しめる。泥の中から4人のカラフルパンツをはいた人物が現れ、体操をしていると巨大な腕が伸びて来て熊パンツをはいた男をつかむ。つかまれた男は固まって栓抜きになる。栓抜きを使って開けたビンの中の液体を飲んでいる自動車パンツの男にも巨大な腕が忍び寄り、彼も固まってネックレスになる。ネックレスを手にした森パンツの男は、色々縞々パンツの男の首にネックレスを掛けるが、そこにも巨大な手が現れ……というように、ページをめくってズームアウトするたびに奇想天外な世界が展開してゆく。巨大な手につかまれた人物が次々と予想できないものに変化していくのだが、造形的にはなるほどそうきたか、と納得させる面白さがある。絵本のページをめくるという機能を最大限に生かして、シュールでおかしな世界を作り出した。画面は大胆に白のスペースを作り、単純化した太い輪郭線で描かれた絵と文字の配置はデザイン的にも見事に整理され、絵本にリズムを生み出している。絵本の中の登場人物を、カバーに描かれたたくさんの「ばんつさん」から探し出すのも楽しい。

(まつもと・たけし＝絵本・美術評論家、ちひろ美術館常任顧問)